

子どものいきがい



小林慶子

「生きがい」とは一体何を意味するのだろうか。このためにこそ自分は生きているのだ、生きていてよかった、まさに生きるに値するといった、至極平凡な内容が思い浮かぶかもしれない。しかし、「子どもの生きがい」となる問題はそう簡単ではない。それは「親の生きがい」抜きには論じられない問題ではなからうか。それがこのささやかな小文で主張したいことである。

そもそも、何のために生きるか、生きがいは何であるかをはっきり意識して生活するということは、多少とも物を考える成人の段階で初めて可能なことであろう。子どもにとっては、生きがいは彼らの生きている世界そのものであるといつてよいだろう。彼らの周囲には、無限ともいえる未知の世界がひろがっている。遊び、作り、たずね、知り、驚き、興味のおもむくところすべては、彼らの生きがいとなって未知の世界をどんどん広げていくのである。もし彼らの生活から、その一部たりとも削除したら、彼らの生活は真空状態ともなってしまうのである。おとなが頭の中で考えている生きがいなどというものを、子どもはその全生活をもって生きているのである。彼らにとって生きていること、活動していることが生きがいそのものである。そして、その生き方が年齢と共に変化し、成長していくところが、のびていく者の特権であり、おとなのよるこびでもあるのだ。ここに深く親の生き方がかかわっているのである。

さて、わが家には小学二年の長女、幼稚園年中組の五歳の二女、年少組の四歳の長男がいる。同じ親から生まれ、同じ家庭環境に育ちながら、当然のこととはいえ、

よくもまあこうも個性が違うものかと驚く。

長女は学校の生活を別にすれば、もっぱら読書が生活の中心にあるらしい。小学校低学年向きのものから、小学校中、上級程度の創作童話や、アンデルセン、グリム、さらに世界の民話、伝記などかなり広い範囲にわたって、飽くことない興味をもって読み続けている。彼女は長子なので、幼い時に私が落ちついて相手することが出来たことも幸いして、一歳四ヵ月ごろから、福音館の「ウサコちゃん」シリーズを読んでやり始めた。その後、かなりの数の福音館の絵本のご厄介になり、やがて下の子どもたちも一しょに聞くという習慣ができていった。長女は次第に絵本を卒業して、小学校入学と共に岩波おはなしの本などの民話の世界にはいつていった。私は毎晩子どもに本を読んでやりながら、彼らと共通の世界を楽しむむという喜びを深く味わったのである。下の二人には、長女が、自分が前に読んでもらった絵本を読んで聞かせるようにもなった。彼女は一応読んでもらったものを、次は自分一人できりかえし読み、自分の前に未知の世界がどんどん開けていくのに胸をおどらせ、喜びを味わっているのである。「風にのってきたメアリー・ポピンズ」

などのあのメアリー・ポピンズ物語は、終始彼女の興味をとらえて離さなかった。あの時の目の輝き、また自分で読んで内容を話しに来る時の表情、弟妹たちとジェインやマイケルになって劇遊びをする時の楽しそうなようす、これらを見るにつけ、なるほど本を読むよろこびが、この子の生きが이었다のだとしみじみ思ったことである。と同時に、親が子どもとこの世界を共にして喜びをわかち合うことが、どんなに大切なことかということをも痛感するのである。

時につまらぬ本も借りてきたり、マンガを読んだり、昨今のいい加減な学習雑誌の類も、借りて読んでいるようである。しかし、これらを気にすることもなければ、制限する必要もない。それらは一旦彼女が知った本物の読書のよろこび、ベールが一枚とれるように、目の前に開けていく新しい世界の新鮮な魅力に遠く及ばぬことを自ら悟るであろう。ある時は世界を共にし、ある時は親が自信をもって子どもたちに新しい世界を示し、どうでもよいものは「ただ見て過ぎる」ことを学ばせるのは、読書の世界のみなことではない。かくの如くして、長女は目下、シュリーマンのことを書いたヴィーゼの「夢を

掘りあてた人」を毎夜私と共に楽しんでる次第である。

二女は長女の同年齢時に比べて、本への興味はさほどではないが、目にはいるもの、手にとるものごとく物が創る対象らしい。あき箱でござれ、包み紙でござれ、彼女の手にかかると、まがりなりにもたちまち彼女の頭の中で考えているものに形作られていく。また時に、ひとりで長い時間絵を描いたりしている。この子は視覚と手を動かすことによって自分の世界を創造し、それを広げていくのである。両親のどちらにもない要素をもったこの子が、精一ぱい生きられる方向を我々は示してやらなければならぬ。ここでもまた、親の自信をもった生き方が不可欠なこととなるのである。

四歳の長男にいたっては、犬コロのように一日中、からだ全体を動かして遊びほうけている。庭に穴を掘り、泥をこねまわし、近所の子どもたちと取組み合い、走り回るといふ毎日である。そして当世のご多分にもれず、仮面ライダー、スペクトルマン等の一連の怪獣にのぼせ上がって、ドタンボタンやっている。彼の頭の中には、朝起きてから夜寝るまで仮面ライダーの他はないようである。それは文字通り彼の生きがいである。まことに子

どもの生きがいとは、子どもの興味の対象であり、好奇心の対象でもある。だからこそ、彼らの生きている世界そのものだともいえるのである。この興味という一つの心理的態度が、実は彼らの成長の重要な原動力の一つになっているのである。この興味をどの方向に向け、どう成長させていくか、再び問題は親の生き方にかかわってくる。

いかに私はテレビが気に入らぬからといって、かくも子どもを夢中にさせている怪獣番組を禁止する人はいないであろう。(もっとも私とて、あのあくどい商業主義の番組に百パーセント賛成しているという意味ではありません。念のため) テレビで見ただけでは満足せず、適当にコスチュームをつけ、奇声を発してあの真似をして遊ぶのだからかなわない。わが家でも上と下の二人が毎日飽きもせず、「ライダー・キック」などと叫んでドタンボタンやるのを見せられると、親たるものまったく嘆かざるを得なくなる。しかし、これも辛いが浮世のおつき合いと単純に諦めるか、さりとてテレビ禁止とはいかぬ。

事はマンガやつまらぬ本の場合と同様である。子どもは、良い本の世界を知っていながらも、なおかつ、マン

が読みたいのである。それがつまらぬものとわかっていくように、テレビも次第に「見て過ぎる」段階に達するのを待つのである。それには、怪獣番組などに対する子どもたちの動きを十分に読みとることが何より大切であろう。また、子どもたちと同じ世界に心を遊ばせてみるのが、別の新しい世界を開いてやるために必要なことではなからうか。かくて、目下私は彼らと共に、いろいろな怪獣とおつき合ひしており、彼らと次回ライダーの運命や如何にと手に汗握ってハラハラしているという次第なのである。子どもの生きがいともいふべき世界を共有しているというお互いの信頼感、それが精神生活をよりよい方向に向かわせ、次の段階に発展するための不可欠の条件ではなからうか。

マンガも怪獣も、子どもたちを生き生きさせ、彼らの生活を盛り上げていくかぎり、一つの段階として十分意味のあるものであろう。しかし、やがてそれらは本当の読書の魅力なり、彼らを内から力づけていく本物にとって代わられるべきものである。子どもの生きがいたる彼らの生きる世界、興味の対象に、いかにして本物を示し、その成長を助け、子どもの生きがいをして真の「生きが

い」たらしめるものは、親の生き方そのものである。親が何を生きがいとして生きるかが問われているのである。世上、親の権威の失墜はなだしいと喧伝されること久しい。それでは子どもの生きがいも何もあったものではなからう。子どもの自主性尊重という殺し文句が、親の責任逃れのいい訳になってはいないだろうか。今、自分の世界で精一ぱい生きていく子どもたちに、親も自分たちと同じ世界を共有していくという信頼感と安心感をいだけさせて、彼らに高く新しい世界を開いてやる責任を、自信をもって果たさなければならぬのではなからうか。「汝ら若き日に汝の創造主を憶えよ」という言葉が、私にとっては三人の子どもたちの生きがいを真の「生きがい」たらしめるよりどころであり、心の最も深い所での祈りなのである。